

法蔵 329号 三月号

・ 3月8日(日)午後1時より「おみがきもの」を予定しておりましたが、コロナウイルス感染拡大に対する対応として中止させていただきます。

・ 3月12日(木)午後0時より「定例法話会」を予定しておりましたが、カレーライスを集まって食べていただくのもまずいかと思いますので、今回は中止とさせていただきます。また次回、何卒よろしくお願いたします。

・ 3月20日(金)午後1時より「春彼岸会法要」は、院内勤めにて行わせていただきます。

みなさんどうか元気にお過ごしいただき、ご一緒に春を待ちましょう。

(春のお彼岸は3月17日から23日までとなっております。)

・ 3月28日(土)午後1時より 「親鸞聖人御命日のお参り」

・ 4月12日(日)午後0時より 「定例法話会」 お話していただく布教使さんは、まだ決まっていません。
「月に一度、二時間仏さまのお話に耳を傾けてみませんか!!!」

・ 4月28日(火)午後1時より 「親鸞聖人御命日のお参り」

「過去と他人は変えられない、変えられるのは自分と未来」

(僧侶・産業カウンセラー 三橋尚伸)

～あたり前の話なのです。どんなに悔やんでも過去は変えられないのです。そしてどんなに願っても、相手が態度を変え昨日はごめんなさいと言って、今日から私は心を入れ替えますと頭を下げて来ることなどということは決してないのです。しかし、あれこれと考えてしまうのです。

・ 豊田市の守綱寺からの寺報「清風」で『遺愛集』から次のようなお話が載せられてきました。

「たまりし 処刑日までの いのちなり ころ素直に 生きねばならぬ」

「白き花 つけねばならぬ 被害者の 児に詫び足りず 悔いを深めし」

この歌集の作者・島秋人さんは、昭和34年25歳の時、空腹に耐えかねて民家に押し入り、その主婦(1人の子どもあり)に見つかり、殺してしまったことで死刑判決を受け、昭和42年11月に処刑された。島さんは昭和9年6月28日生まれ。幼少期を満州で育つ。戦後父母と共に新潟県に引き上げたが、

母は結核で間もなく亡くなった。本人も病弱で結核やカリエスになり、7年間ギブスをはめて育った。小・中では成績が一番下だった。周りから疎んじられるとともに性格がすさみ、転落の人生が始まった。少年院にも入れられた。島さんは中学生の時に一度だけ自分の描いた絵について先生に褒められたことを思い出し、その先生に今の自分は死刑判決を受け刑務所にいること・先生に絵を褒められたことを書き送った。すると先生の奥さんから手紙が寄せられ、その中に奥さんの短歌が添えられていた。それから短歌に関心を持ち、奥さんの手ほどきを受けて毎日新聞の短歌欄にも取り上げられ、処刑後『遺愛集』として、その中から選んで歌集が出版された。(以下はその歌集『遺愛集』の中の島さんの手紙の一部です。)

人間である以上、僕は生きたいという事は第一です。「極悪非道」って善人が作った言葉だと思います。実際にこれに当てはまる人はいないのではないかと僕は思うのです。どんな罪を犯した者でも真心(まごころ)のいたわりには^な哭くものです。それがどんな小さいものであっても、うれしいものです。そして自分の罪を深く悔い、つぐないの心を作って、あたえられた刑に服せる様に心を作ってゆくのです。善人と思っている人は悪人と見る人があるけれど、悪人と思っている者に悪人とみる心はないと僕は思います。あわれなやつと思う位でしょう。それぞれに理由があるからです。にくむべき罪人であっても極悪ではない。極善という人が居りますか?おそらく人間としてはないだろうと思います。(略)

僕は自分に云い聞かせています。「気の弱い人間」でしかない者だった、と。人生って不思議なものです。わからないなあ!と思う。でも、とても生きることが尊いって事だけはわかります。僕は犯した罪に対しては「死刑だから仕方ない受ける」と言うのではなく「死刑を賜った」と思って刑に服したいと思っています。罪は罪。生きたい思いとは又別な事だと思わなければならない。やせがまんではない。僕の本心であるようだ。(略) 知能指数のひくい、精神病院に入院もし、のうまく炎もやって、学校を出てより死刑囚となるまでは僕の内側の「もの」を知らなかったのを、短歌と多くの人の心とによって知り、人生はどんな生き方であっても幸せがあるのだと思い、被害者のみたまにも心よりお詫びをし、つぐないを受けるころを得、現在では人間としての、こころのしあわせを深く知り得たことをよろこぶのです。

～被害者のことを忘れてはいけないのだけれども、想像もつかない人間の可能性を感じます。

・忠峰コーナー 「老い進み 知らぬまに云う ^{ひとりごと} 独り言」

「^{によびがもん} 如是我聞 我かく聞けり ^{ちどりあし} 千鳥足」